

「救いへの二つの道」

清水光雄

プロテスタント教会は信仰によって人間は救われると言います。神の無条件の愛を信じる者がその信仰で救いに導かれます。私達も教会で洗礼を受ける時、そのように教えられました。勿論、この義認信仰はルターの教えで、多くのプロテスタント教会はこの教えに従って教会を形成しています。

ウェスレーは18世紀に生きた英国国教会の司祭で、「救いへの二つの道」を救済論の内容にしました。彼は第一の救いの道を1で述べる「聖なる生活」の回復、第二の道を2の、罪の赦しに置きました。国教会は信仰の核心を信仰義認と理解せず、信仰と実践活動による救い、つまり、僕の信仰と捉え、ルターと異なる信仰理解を示しました。国教会の語る信仰をウェスレーは「救いへの一つ道」と呼びます。彼がこの道に言及した理由は非キリスト者の救いの問題があります。もしイスラム教徒等の信仰者が「聖なる生活」を送るならば、彼らは天国に行き、その責任は神が持つとウェスレーは言います。彼らが僕の信仰を持ち、愛・気質の生活を送るならば、非キリスト者の救いは否定されてはなりません。異教徒の救いも考えながら、救済内容「救いへの二つの道」を考えてみましょう。

なお、本書では筆者とウェスレー関係の作品を本文で略記として注に挿入します。

- * 清水光雄『ウェスレー思想と近代』（教文館、2017年）を『近代』と略記。
- * 同 『メソジストって何ですか』（教文館、2007年）を『メソジスト』と略記。
- * 同 『民衆と歩んだウェスレー』（教文館、2013年）を『民衆』と略記。
- * The Bicentennial Edition of the Works of John Wesley, editor-in-chief Frank Baker

(Nashville: Abingdon Press,1984-) はBEと略記。

- * The works of the Rev. John Wesley, M.A, ed. Thomas Jackson (London :Epworth Press,1829-31) は Works と略記。
- * Letters of the Rev. John Wesley, A. M. ed., John Telford (London : Epworth Press,1931)は Letters と略記。
- * Albert C. Outler, John Wesley(New York:Oxford University Press,1964)は JW と略記。

1 全生涯のウェスレー

ウェスレーが語った「救いへの一つの道」は「聖なる生活」（「愛によって働く信仰」）です。当時の国教会は、信仰理解が理性的同意としての信仰と、この理性的信仰には必ず愛の実践が伴うと言います。ウェスレーが生きた時代は18世紀で、この世紀は合理主義・啓蒙主義の精神で、理性の時代でした。理性で聖書を読むと、神の存在が記述され、神の存在を理性が同意すれば、その人はキリスト者で、そうでないと、非キリスト者になります。しかし同時に、国教会はこの理性的同意には必ず愛の実践が伴うと言います。神が存在すれば、その神は義であると聖書は語ります。そうであれば、人間はこの社会で正義を実現しなければならず、神が愛であれば、人間は隣人を愛するべきです。

救いの完成を実践という、倫理的な生活で検討する国教会は、信仰のみで義とされ、救われると語る、ルターの救済理解と異なります。国教会はむしろ信仰と服従による救いを語り、救いの確かさを倫理的服従行為に置きます。国教会17世紀の神学者は「義認とは・・・約束なのだから、義認されるべき人間の側に、福音の要求する服従を必ず前提すべきです」と語り、福音が要求する服従は罪を悔い改め、真正な倫理の成就を求めます。この状態が人間の側で果たされる時、救いがその約束として人間に与えられます。従って、神によって受け入れられる救いの確証は信仰ではなく、良き働き・倫理生活で求められます。上記の神学者は更に語ります。「愛によって働く信仰以外に、神に受け入れられるものはありません。どんな信仰も、それが芥子種ほどの小さいものに過ぎなくても、もし愛によって働くなら、確実に神に認められ、受け入れられるで

しょう」。愛によって働く信仰が国教会の信仰の核心でした。他の同期の神学者も同様に述べます。「神によって義とされ、受け入れられるための最も大事なことは神の命令を守り、愛によって完成される信仰を持つことです」(『近代』、180)。

国教会によると、聖霊の働きは人間に神理解の明確な知識を与えず、完全な倫理的生活を人間に促進させることです。ウェスレーは国教会の倫理的な考え方に同意しますが、明確な知識理解の確かさを否定する彼らを批判します。その理由は後述するように、ウェスレーが承認したロックの認識論を国教会が批判したからです。国教会は心・魂に働く聖霊の働きを認めなかったからです。このようにウェスレーは国教会と同様、理性的同意としての信仰と、その信仰には実践が必ず伴う行為、「愛によって働く信仰」を強調し、この生き方を「聖なる生活」(隣人愛)と呼び、この生き方を為す者に「救いへの一つの道」を示しました。この「聖なる生活」の意義をウェスレーに確認させたのは、彼のアダム理解に由来します。

ウェスレー神学はこの「聖なる生活」を創造時のアダム理解から導きます。アダムが創造された時、完全なる神である故、アダムも完全な姿を担い、完全なる諸機能(悟性・意志・自由)を備え、原初のアダムは理性的、道徳的人間として創造されました。また、愛の実現を果すというテーマが原初のアダム理解に鳴り響きます。アダムの心に愛が与えられ、永遠の昔から、人間は愛を成就すべき者として創造されました。愛は永遠から永遠にわたり人間の普遍的倫理の原理です。信仰が生まれたのはアダムが罪を犯したためであり、本来、神と共に生活したアダムに信仰は不要でした。それ故、信仰の唯一の目標は愛の律法を成就することで、愛の成就から離れた信仰はそれ自体無価値だとウェスレーは生涯確信します(『近代』、105 - 9)。

私たちプロテスタントはアダム理解にそれほどの関心を払いませんが、東方やカトリックはアダム理解に人間観を構築し、ウェスレーは東方の影響で、前期の時代から晩年に至るまで、アダムの精神状態や肉体的組織運動などに多くの言及をなし、「救いへの一つの道」として幅広く考えました。このように、彼は「聖なる生活」の生き方を取り上げ、この生き方は国教会・東方・カトリック・異教徒の思想体系であったと同時に、原初のアダム理解から生まれたウェスレー

の全生涯にわたる思想体系でした。さて、ウェスレーが社会で如何に愛の生涯に徹したことに触れておきましょう。

メソジストは下層中産階級で(職はあるが、困窮者よりも上位階層)、当時の彼らの経済状況を見ると、英国人の当時の平均年収は30ポンド(現代では1ポンド約1万9千円)であるのに対し、メソジスト25%の平均年収は30ポンド(約58万円)以上、10%は30ポンドから20ポンド(約38万円)、65%は20ポンド(一日約千円)以下でした。この生活状況で多くの苦しめるメソジスト会員のために、ウェスレーは診療・治療・教育・経済活動を支援する地域支援活動に積極的に関わりました(『民衆』、42 - 179)。

オックスフォード時代、大学のフェローであったウェスレーはこの聖なる生活を学生たちと一緒に過ごし、大学の壁を越えて町に出て行き(現代のボランティア活動)、その地域の労働センターや刑務所、病院を訪れ、子供たちの教育・配慮を大学のスケジュールで行い、学生と共に社会活動・愛の実践活動に励みました(『メソジスト』、89)。

1738年以降生涯の終わる迄、ウェスレーはこの地域支援活動・隣人愛に心を砕き、実践活動を行いました。例えば、ウェスレーは公共無料診療所を1746年にロンドンで開き、その病院の責任者になり(17世紀国教会は教育指導の一環として司祭候補者に基本的な薬学研究を履行)、患者数の増加で次にブリストルで、最後にはニューキッスルで、合計三か所の無料診療所を開設しました。また、貧困者が自分で病気を治せる『根源的治癒法』を彼は1747年に出版し(生存中23版、死後15版、米国24版、フランス・ウルシュ語翻訳)、米国では19世紀開拓者の家庭で聖書と並んで最も読まれた書物です。ウェスレーは1748年に学校を創立し、貧困者の授業・宿泊料を無料にし(現在、この学校は英国のバースで高校教育を展開)、同年の1748年に彼は無利子ローン企画を展開し(一定額を3ヶ月間無料で貸し付け、その後返済。最初の種基金は一人20シリング、24年後には5ポンド)、貧困者へのサービスを徹底しました。また彼は電気治療器具(フランクリンの理論から)の設計を1756年に行い、無料診療所で患者に自由に利用させました。そして多くの巡回区で医学的配慮の欠如を素早く見抜いたウェスレーは信仰復興時期の

頃から、地域の支援ネットワークを作るため「病人を訪問する」運動をメソジストで創設し、各地域で組会の組織体制を形成し、キリストの類似性に向かって本来あるべく自己を日常的に形成するように指導しました。

ウェスレーは病人を訪問しなさいと会員に伝えます。病人にお金や医者を送るよりも、あなた自身が病人の住む所に行き、病人の体・目を見なさい。お金持ちが貧困者に共感を抱かない多くの理由は彼らを訪問しないことだと言います(BE、3:387)。キリストを模倣することはイエスの中に貧困者と共に生きる共感を見出し、それを自分に身に付けることです。会員は貧困者・病人を訪問することで形成される共感を体感し、それを成長させることです。愛と共感・気質はメソジスト神学の心臓部で、メソジスト伝道の中核でした。

さて、「聖なる生活」は東方・カトリックの基本的な人間論で、国教会は東方からこの思想を学び、国教会司祭の父サムエルも同様の信仰を確信し、完全を探求したティラー、ロー、ア・ケンピス等の神秘主義者、イスラム教徒などの異教徒も愛の働きを重視しました。特に、ウェスレーがモラビア派の影響で1738年5月24日に心に語りかける聖霊の働きを体験しましたが、この体験後しばらくの間、嘗ての自分は怒りの子で、キリスト者ではなかったと牧会者ウェスレーは自己批判をします(BE、18:216、252、;19:27, 29 - 31)。しかし1774年に『日誌』が再販された時、彼は上記の箇所注を付け、この極端な自己解釈は誤りで、当時自分は子の信仰を持っていなかったが、僕の信仰、つまり、「聖なる生活」を送っていたと訂正します。この5月24日の体験以降も彼は地域支援・隣人愛活動に積極的に励んでいたため、ウェスレーは全生涯、「愛によって働く信仰」を貫き通しました。但し、彼は1で「救いへの一つの道」として「聖なる生活」者を僕の信仰者と呼びますが、2で述べるように、「救いへの一つの道」として「信仰義認に基づく確証理解」者を子の信仰者と呼びます。救済の対象である僕の信仰者と子の信仰者を説明しましょう。

ウェスレーは「神を畏れ、義を行なう人」(使徒言行録 10 : 35) の倫理的信仰を僕の信仰と定義し、この理性的倫理の強調は後期ウェスレー神学の特徴でした。

彼は僕の信仰をキリストの義と離れて理性的に主張することで、キリスト教の究極目標を倫理の内に置き、国教会と同様、倫理的宗教理解を宗教知識の一形態として主張します。しかし彼は同時に、子の信仰をも語ります。子の信仰は1738年5月24日のアルダスゲイトの出来事で彼に与えられ、この出来事以降、彼は二種類の救済理解を主張し、ウェスレー固有の救済論を子の信仰に置きました。彼は一方で倫理生活による宗教知識を確信する、間接的な理性的倫理宗教知識を承認し(「聖なる生活」)、他方、倫理生活ではなく、霊的、感性的体験で与えられるエレグコスとしての直接的な感性的宗教理解(「信仰義認に基づく確証理解」)を説きました。そして、僕の信仰者(「聖なる生活」者)は子の信仰者に進むよう彼は励ましました

僕の信仰者は真の信仰者で、1785年の説教でもキリストにある心を持ち、キリストが歩かれたように歩く者は僕の信仰者です(BE、2 : 543)。子の信仰ではなく、僕の信仰しか持たない者も救われ、そのような人としてウェスレーは「聖なる生活」の対象者として上記に挙げたロ - 、ア・ケンピ等の神秘主義者等の人々を挙げました(Works、7 : 379 ; 10 : 391、403、433 ; 13 : 132)。もし彼らが神の義を理性的に追い求め、それに従って倫理生活を送るならば、信仰義認(子の信仰)が与えられなくても、理性的信仰で救われます。

アルダスゲイトの出来事直後、ウェスレーは全的墮落と信仰による救いに多くの関心を向けたため、1738年直後の短期間、彼は理性的知識形態を否定も強調もしませんでした。1738年の説教「信仰による救い」で神の存在・諸属性・報酬と審判、道徳的善悪の区別などの知識は異邦人に要求され、異邦人はこの知識を持ちますが、確証に基づく、神の子とされた信仰(実存的知識)に比べると、この理性的信仰は「単なる」信仰と言われ(理性的知識)、積極的に評価されません(BE、1:119)。確かに理性で知られる神は実存的な私にとっての神ではなく、この神理解では人間を救えないとの発言はアルダスゲイト以降、彼の著作に一貫します(BE、11:268, 1:581, 2:177)。しかしウェスレーが理性的宗教知識評価を体験後徐々に回復し(BE、11:49, 2:7, 1:581)、後期になると直接的・霊的体験としての子の信仰の強調と共に、理性への肯定的評価がますます高揚し、僕の信仰への言及回数も多くなります。

ウェスレーは赦しの確証で与えられる信仰を子の信仰と呼び、この信仰を最晩年の1788年の三篇の説教(BE、3:492 - 501;4:29 - 38、49 - 59)で展開し、更に1791年の説教「信仰について」でも示します。最晩年のウェスレーは子としての信仰理解の喜びをこれらの説教で著わしましたが、同時に、後期の別の三編の説教で僕の信仰の意義を強調します。1785年の説教で神の存在や属性、善悪の区別がある程度全ての国民に知られ(BE、3:199)、1788年の説教で神の創造された世界から力と知恵に満ち、正義で隣れみ深い創造者の存在が推論され、そこから永遠の世界や未来での報酬と裁きの存在が結論付けられ(BE、4:51f)、1790年の説教で、ある程度の善悪の区別はキリスト教世界に止まらず、全てのイスラム教徒・異教徒、更には教養的でない種族にも見られます(BE、4:163;2:535f、552f、569 - 77、593f ; 3:400、494 ; Works、9:322)。このように、1785年から1790年の三説教で見られたように直接的・霊的信仰概念と同様、理性的宗教知識の評価をも彼は高く示しました。

ウェスレーはまさに2で語られる内的・感性的宗教理解と1の理性的・倫理的宗教理解との二重性を強調し、当時の英国は啓蒙主義の精神から後者の理解を訴えましたが、ウェスレーが後者を受け入れたのは啓蒙主義精神の理性的思考や、東方・カトリック、更に、創造時のアダム理解からの学びがあり、反対に、2の直接的な宗教理解を認識論的なロック、マルブランシュの影響で受け入れ、この宗教理解をメソジスト固有の特徴として強調したのです。

では、ウェスレーは異教徒をどのように理解したのでしょうか。17世紀後半より海外宣教が積極的になりましたが(ウェスレーの異教徒理解の多くは海外に出向いた人々の旅行雑誌)、彼は1784年にメソジストによる伝道協会の設置に反対しました。その理由は、異教徒がキリスト教に改宗しない原因としてキリスト教徒がイエスに従った生活をしないことがありました(BE、23:296)。同じ時期の説教でも、キリスト教徒は天国と地獄ほどにキリストの心を心とする本来の生き方から離れています(BE、2:580 ; Works、11:59 - 79)。ウェスレーがキリスト教徒を批判する文献は多くあります。米国先住民やアフリカの土着の宗教は高度の文化に生きる英国キリスト者をはじめフランス・オランダのキリスト者、更にはヨーロッパ世界のキリスト者達たちの徳と気質の水準と

ほとんど同じだと彼は語ります。特に山上の説教で食べ物や衣服などの質素さ・謙虚さに関して異教徒のほうが余剰のものを蓄積し、食欲に生きるキリスト者よりはるかに優れ(BE、1:617)、また英国の貧しい者が放置されている状況を見、このような無慈悲の状況は米国先住民には見られないことを考える時、彼らの道徳を無視するキリスト者は誠実な異教徒に改宗すべきだとウェスレーは言います(BE、1:616f;20:445)。更に、キリスト者がインド植民地の人々を奴隷化している状況で、キリスト教徒はキリスト者と言えるのかと問い、英国文化の道徳優越性に生きる英国人を誠実な異教徒に回心させるべきだと彼は言います(BE、23:4、39;2:465-8、578f)。ウェスレーが語る諸宗教の人々と共に生きる根拠は教理・理論の問題以上に、貧しい人々を解放するために神の愛に参加し、愛の実践と気質を形成することであったのです。神の救いの働きはユダヤ教徒であれ、イスラム教徒であれ、愛を行うすべての者に与えられるので、これが宗教間の対話の土台になると彼は言います。

ウェスレーが死ぬ三年前に書いた説教「信仰について」を検討しましょう。この説教でウェスレーは信仰の低い順番に唯物論・理神論・異教徒・ユダヤ教徒・洗礼者ヨハネ・カトリック・プロテスタントを書きました。つまり、宇宙の中に物質以外の存在を認めない唯物論者、神の存在と諸属性、終末での神の報酬・審判・魂の不滅性を信じる理神論者、イスラム教徒をも含む異教徒の信仰(18世紀のキリスト教以外の他宗教の情報はユダヤ教、イスラム教で、仏教、ヒンズー教の知識は極めて限られ、不正確でもあった)、その上位が旧約聖書を信じ、メシアの到来を待ち続けるユダヤ教徒などです。

最初に唯物論者が取り上げられます。「もしそのような信仰理解があるとする、最も低い種類の信仰とは宇宙には物質以外の何ものも存在しないと信じる唯物論者(最近のケイムス卿のような人物)の信仰がある」(BE、3:493)。当時はケイムス卿やカメス卿の唯物論者がおりましたが、彼らは宇宙に物資以外の何ものも存在しないと語ります(BE、3:498)。では、彼らは物質と神との関係をどのように考えたのでしょうか。

当時、世界は時計細工と考えられました。神は時計を造り、世界は時計の如くチクタク・チクタクと動きます。このように、唯物論者は世界を自然の機械的

運動と同一視し、神の働きをこの運動と同一視するので、この地上で神が自然を動かす、神のみ手の働きを否定します(BE、3:498f; 23:214)。他方、理神論者は神が世界を創造したと語りますが、同時に、神の働きをこの創造された時の最初の一点に限定することで、創造後の自然は唯物論者と同様、自然の自らの法則に従って動くと言います。彼らは神の存在を語りますが、神を棚上げにする世界観を構築したのです。この説教での私たちの関心は、異教徒の信仰が理神論者の信仰の上位に置かれていることです。ウェスレーは理神論者を嫌っていたのでしょうか。

18世紀の合理的なキリスト教の意義を認めたウェスレーは、この精神を宗教に取り入れた理神論者に異論を唱えたのでしょうか。確かに彼は理性を自律的規範として機能させ、理性の高揚を讃える啓蒙主義の理神論に批判を加えましたが(BE、2:588)、それ程敵対的關係ではなかったでしょう。彼は18世紀を寛容な時代であると認め、それとの関係で理神論に言及します。隣人愛に徹底した18世紀、イギリスやアイルランド、フランスやドイツ、ヨーロッパのどこをとっても、地上から迫害が消え、貧しい者への慈悲深い時代が到来し、この18世紀がそれまでの歴史の最上の時期であったとウェスレーは賛美します。しかしこの社会状況は不信仰の理神論の結果だとする反論に対し、原因が何であれ、良い結果を大いに学ぶべきだと彼は18世紀の寛容な精神を賛美したのです(BE、3:451f)。まさにロックの『寛容についての書簡』(1689)です。

更に興味深いのは、たとえカトリックの信仰であれ、プロテスタントの信仰であれ、これらの信仰が当時の英国キリスト教界の一般常識であった教理を信じる宗教と同一視(『メソジスト』、201-4)、つまり、気質、愛の実践を伴わない教義と救いを同一視すると(信仰のみで救われる、この信仰義認を救いと同一視し、信仰後の愛の働きは欠如しても問題はないと語る)、プロテスタントの信仰は「異教徒・理神論・唯物論者の信仰に劣る」のです。なぜなら人間を救う信仰は「神を畏れて正しいことを行う」信仰で、これが僕の信仰内容です(BE、3:497)。異教徒、理神論者にも、更に唯物論者の信仰にも劣るのは信仰と教義を同一視するプロテスタントだと語るウェスレーの信仰理解を私たちはどのように理解するのでしょうか(『近代』、50-57)。ウェスレーは礼拝形式と儀式の変更を求める

だけで、人間の気質と生活態度の変更に導く、愛によって働く信仰を求めなかったルターとは異なる信仰理解を断言します(BE、2:465)。

異教徒は「神の内なる声を聞き、真の宗教の本質を神によって教えられ」(BE、3:494f)とウェスレーは言います。彼は自然の光(先行の恵み)である神の内的声に誠実に応答することで、理神論者以上に真の宗教、永遠の救いを知り、それに即して生きる異教徒に高い評価を与えます。この考えの背後には先行の恵み(prevenient grace)の理解があり(『近代』、138-50)、この考え(人間が思索、行動する以前に人間に語りかける神の恵みの教理、全人類の良心に語りかける普遍的啓示の存在)に従い、ウェスレーが生涯、全人類の良心に語りかける愛の宗教を語りました。唯物論者と同様、異教徒にも良心で神の内なる声を聞き、真の宗教の本質、愛の宗教を神によって教えられ、それに即して生活するように励まされています。そうであれば、異教徒の信仰は愛の働きに消極的なプロテスタントよりも優れているとウェスレーは語ります。良心が与えられているプロテスタントの私たちはどのように反応するのでしょうか。

ウェスレーが先行の恵みで述べたことは、非キリスト者がキリストを否定したかどうかではなく、聖なる生活を歩めば神の愛と救いが彼らに与えられ(BE、3:296; Letters、2:118; Works、8:336)、その意味で彼は1の信仰理解を主張したのです。ウェスレーは救いに関し理性的救いと2で述べる感性的救いを区別せず、キリスト教と他宗教との区別をも禁じ、世界の混乱ではなく、共に生きる道、世界の平和をいかに願っていたのか、私たちは学べます。神を恐れ、神を愛し、神の意志に則して生きる者はその信仰理解、教義理解、礼拝形式がどうであれ救われ、僕の信仰者のキリスト教徒もイスラム教徒も救われます。ウェスレーは2で述べる心の感性的宗教理解だけでなく、愛の実践という倫理的活動による理性的な人間の救いの恵みを啓蒙主義者だけでなく、全てのキリスト教徒・異教徒にも語るのです。

1で述べた全生涯のウェスレーの基本的立場を現代的に表現するならば、ウェスレーはカトリックやメソジスト教派以外の諸教派と、また、イスラム教徒などの異教徒と一緒に生き、彼らと共に、愛・平和を求め続け、戦争を避け、原爆投下に異議を唱える集団を形成しようとする試みを続けたのではないのでしょうか。

18世紀イギリスの重要な課題は、16世紀西方キリスト教界で起こったカトリックとプロテスタントとの分裂に止まらず、17世紀プロテスタント内のピューリタンと国教会との分裂、ウェスレー時代では国教会から分離したクエーカー、バプテスト派、長老派、独立派などの人々と、いかに共に生き、寛容な世界を形成するかにありました。この18世紀の寛容な時代精神を生き、この問題に真剣に取り組み、独自の解決策を模索したウェスレーは現代の様々な宗教・社会問題でどのような示唆を与えてくれるのでしょうか。

2 1738年以降のウェスレー

ウェスレーは1735年10月に英国の植民地支配下の米国ジョージアに出かけ、約二年半滞在し、彼がジョージアにいた時の最大の恵みはモラヴィア派の宣教師シュパンゲンベルグと出会い、信仰理解を学んだことです。ウェスレーは彼に質問されます。「あなたが神の子である」という、神から直接与えられる証を持っているかどうか、そのような証をもって「イエス・キリストがあなたを救ったことを知って」いるかどうかです。ウェスレーは「知っている」と答えましたが、それはむなしい返事であったことを認識します(BE, 18:146)。彼が聖霊理解の無知を確認し、この時以来、聖霊理解が彼の神学的探究の課題になりました。米国からの帰国後、ウェスレーの心を悩ませたのは聖霊理解です。自分の罪が赦され、自分が神の子であることをいかなる確証・証拠を持って知るのかどうかです。

1738年2月1日に帰国したウェスレーは2月4日に英国モラヴィア派の宣教師ベラーに出会い、5月4日まで彼の信仰の指導を受け、5月24日にアルダスゲイト体験で信仰体験に導かれました。ウェスレーはモラヴィア派から、信仰のみが救いに必要で、その信仰に確証が常に伴うことを学びました。彼は1738年5月24日の日記にその日の体験を著しました。

私は心が不思議に温まるのを感じた (I felt my heart strangely warmed)。私は救われるためにキリストに、ただキリストのみに信頼した、と感じた (felt)。

そして神が私の罪を、この私の罪さえも取り去って下さり、罪と死の律法から私を救って下さったという確証が私に与えられました(BE, 18:249f、傍点原著)。

ウェスレーは「感じた」「感じた」、そして「知った」「知った」と述べます。つまり、彼は「感じる」と「知る」ことを同一視し、体験を通して「確証」が神から与えられることを述べます。聖霊の働きでキリスト者は今、既に体験的に味わえ、心で知覚できる確証理解をウェスレーは確信し、信仰による救いとは私の罪が体験的に赦され、罪の赦しの確証を伴う聖霊体験、今、神の子とされる霊的体験としての信仰理解を告白したのです。

神は聖霊の働きで聖霊の証(神からの聖霊体験、つまり、神に無条件で赦され、神の子とされる霊的証言)と、ロマ8:16の言葉に従い、この聖霊の証は常にそれを受け取る人間自身の証(人間に知覚可能な感性的、心理学的現象、つまり、聖霊の証を受けて、私達はその証を愛し、喜び、平和への感性的・心理学的現象の授与、これをウェスレーは聖霊の証と呼ぶ)と一つです。これを確証理解と言います。この確証の教理に論証的確かさ(罪の赦しと神の子の確かさ)が伴うのです。この確証の教理に目に見えない永遠の世界に関する確実な知識が与えられます。

ウェスレーは霊的認識をアルダスゲイトで与えられ、独自の宗教認識論を展開します。眠っている魂の霊的感覚が聖霊の働きで目覚め、自分は神の子とされ、神と和解することを直接的に知るのです。ウェスレーは神との直接的交わりの認識起源を「霊的感覚 (spiritual sensation)」に置き、この感覚で与えられる愛・喜び・平和の感性を「聖霊の実」と呼び、人間は聖霊の直接的な証で聖霊の実が知覚されます。

この聖霊の証の教理をウェスレーは経験主義者のロック(『近代』、294 - 326)とフランスの哲学者マルブランシュの認識論(『近代』、347 - 76)を用いて展開します。歴史的に言うと、認識論の問題は17世紀から18世紀の英国で自然科学や哲学の世界で論じられました。認識論とは難しい言葉ですが、知の問題に深い関心を寄せる学問です。知識の起源はどこにあるのか。理性か、それとも、感性か。知識獲得に関し、理性と感性はどのような関係にあるのか。また知覚、

印象、経験、意識などの概念は知識構成にあたり理性的に把握されるのか、あるいは感性的なのか。最も確かな知識を人間に与える働きは理性か、あるいは感性的なのか。知識は間接的・理性的知識なのか（理性を通して知識は間接的、つまり、理性という概念を通して人間に間接的に理解）、あるいは、直接的、感性的知識なのか（心・魂を通して知識は直接に、つまり、心・魂の感覚で人間に直接理解）。知はいかに成立するのか。知る対象は知られる対象に直接参与するのか、あるいは間接的参与に過ぎないのか。知にはどのような確かさが伴うのか。論証的確かさか、蓋然的なものかです。少し具体的に説明しましょう。

ウェスレーは二種類の感覚機能を述べます。ものに対する身体的感覚と宗教に対する霊的感覚、つまり、身体的五感(身体的目・耳・口など)と霊的五感(心・魂の目・耳・口など)です。ウェスレーによると、身体的・霊的五感に最も深く印象を与えるのは理性的働きではなく感性的働きで、これらの五感の身体的・霊的感覚機能で直接与えられる知識が最も確かな知識です。宗教に関して一般的に言えば、神の存在の知識は身体的感覚機能で得られる身体的感覚証言に、実体等の理性作用を加えて知られます。このように得られる間接的・理性的宗教知識は心に直接与えられる、明晰判明な知覚と確かさを伴う知識(実存的知識)ではありません。しかし身体的五感で与えられる身体的感覚証言と同様に、霊的五感で与えられる霊的感覚証言は直接的、感性的宗教知識で、理性作用も理性による保証も必要としない知識で、この知識に伴う確かさは身体的五感と同様、知覚できる最も確実な論証的知識です。

ウェスレーが生きた18世紀は17世紀以来の知の問題に、特に認識論に深い関心を寄せ、18世紀の宗教思想もまさに一般諸科学の世界で論じられる認識論と密接な関係にありました。ウェスレーはアルダスゲイトで与えられた聖霊体験で知の問題にその特徴を見ることのできる認識論を展開しました。まさにウェスレーの説教集や論文集を見ると、そこには当時議論されていた認識論が至る所に記述されていることは驚くべきことです。

ロックは身体的認識論を展開します。身体的感覚(physical sensation)、例えば身体的目・耳・口などを通して物質の観念が心で理解され、理性ではなく感覚が知識の起源で、心に感性的対象認識が与えられ、その知識は論証的確かさを

伴い、この感性的認識の妥当性を理性で確認する必要はないとロックは言います。具体的に言うと、私たちは茶色や硬い物資を知り、音や色を認識し、又、喜びや悲しみを体験します。これらの感性的対象認識は確実なる論証的確かさを与えます。

しかし国教会は知識の起源を理性に置き、感覚ではないと言います。実体概念を用いない対象認識は知識を成立させず（物質世界も精神世界も実体概念を離れて理解できないのは、物質や精神の感性的性質を支え、持続させるのが実体なので）、反対に、感覚による対象認識は懐疑的感覚理解に落ち入り、認識を成立させないと言います。懐疑的感覚理解とは音、色など人間が感覚で知覚する性質は物質に類似しないと理解します。しかし、ロックは心に実際に知覚されるものを知識の重要な証言として記述し、ウェスレーはロックに同意し、ニュートンの光と色の理論を借りて、懐疑的感覚理解を否定します。18世紀は理性・啓蒙主義の時代で、国教会は感覚ではなく、実体の存在を理性的に承認し、それで確実な世界知識は得られると、理性による認識を主張したのです。

ロックは主著『人間知性論』(1690年)を出版し、第二部では身体的認識論を、第四部ではデカルトの合理論に従い、キリスト教の合理性を展開します。しかし『人間知性論』を抜粋したウェスレーは抜粋箇所を国教会が否定した第二部で、彼は自分の宗教認識論をこの第二部で展開したのです。但し、ウェスレーが展開した宗教認識論は身体的五感に基づく身体的認識論ではなく、マルブランシュの霊的五感に基づく霊的認識論で、しかも、身体的感覚が知識の起源で、理性による証明は必要なく、知識の確かさは論証的だ、とする身体的認識論と同様の証言を霊的認識論にも与えました。霊的感覚証言が知識の起源で、理性の証明は不要で、最も確かな知識を与えるのです。

ウェスレーは前述した聖霊の証をマルブランシュの霊的感覚に基づく霊的認識論で展開します。霊的感覚とは身体的感覚と同様に、魂の目・耳・口による認識です。神は聖霊を通して人間の魂に直接働きかけ（罪の赦しと神の子の確かさの授与）、魂に感性的知覚を与え（愛・喜び・平和による感性的証言・聖霊の実証）、この魂の感覚証言で、神に対する確実な知識・論証的確信を与えます。つまり、聖霊の働きで心の霊的感覚が目覚め、聖霊の実を知覚することで

聖霊の証が授与され、霊的感觉で知られる神の世界に確かさが伴うのです(確証の教理)。

人間が聖霊によって新しく誕生する時、聖霊で人間の目や耳が眠った状態から「開示され」、霊的目・耳、つまり、霊的五感が誕生します。聖霊による霊的感觉の「開示」が確証の可能性を人間に与えます。「人間の耳が開かれ、今や神の内的声を聞くことができる。『しっかりしなさい。今やあなたの罪は赦されたのだ』(マタイ 9:2)。更にウェスレーは言います。

「行きなさい、もう罪を犯さないように」(ヨハネ 8:11) と、神の内的声を聞くことができる。・・・信仰者は心で神の霊が与える恵みを感じ、内的に知覚する。「人知では到底計り知ることのできない神の平安」を彼は感じ、自覚し、「言葉に尽かせない輝きに満ちた」喜びを神の中に感じるのです (BE、2:192f)。

国教会は知識を間接的・理性的宗教知識と捉えますが、ウェスレーはこの知識〈「聖なる生活」〉と共に、直接的、感性的知識をも語ります。国教会によると、聖霊が働く時、国教会は良き働きを理性的に吟味し、聖霊の働きを心に知覚されない理性で間接的に知ります。他方、ウェスレーは「聖なる生活」と共に、神は聖霊を通して人間の魂に直接働きかけ、それで魂の知覚(愛・喜び・平和)が生まれ、人間の知覚が感覚証言を認識することで神に関する確実な知識が与えられるのです。勿論、心・魂に聖霊が働くことを国教会は拒否します。

ウェスレーは内的意識(心・魂)に直接基づく感性的形態(霊的感觉に基づく信仰理解)を強調し、国教会では批判的であったロックの経験的認識論やマルブランシュの霊的認識論(その影響はノリスやバークレーなどの新プラトン神学者たちに)を適用し、「信仰義認に基づく確証理解」(1743年)を展開したのです。信仰義認には必ず確証が伴うのです。

ウェスレーは信仰義認を1744年の会議で次のように語ります。「義とする信仰はキリストで世界と和解する神を超自然的、内的に感じ、見ることで(a supernatural, inward sense or sight of God)」(『JW』、137)。義とする信仰は神の和解行為を「超自然的、内的に感じ、見ることで」。

内的意識に基づく感性的知識形態で理解することだとウェスレーは断言します。信仰義認とは十字架の神の愛を人間が霊的感觉で知覚し、神の出来事(罪の赦しと神の子の確かさ)を心の内的変化で知ることです。彼は同様の感性的知識形を述べます。義とする信仰には「超自然的感覺、聖なる味覚」(a supernatural sensation, a divine taste)が伴うのです(BE、1:223)。

ウェスレーは信仰に感性的形態が伴うので(感覚に基づく信仰理解が伴い、信仰には常に感覺、意識、感情が伴う)、ルターの信仰義認理解と異なります。ルターは義認体験で体験よりも義認の次元により強い光を当てたとすれば、ウェスレーは義認だけでなく、体験の次元にも同じ強さの光を当て、それを確証の教理と捉え、しかもこの感性的知識形態で論証的確かさが伴う確認、確証が与えられます。彼はこのように語ります。「義とする信仰には『キリストは私を愛し、私のためにご自分を献げられた』とする聖なるエレグコス(確認、確信)」が伴います(Letters、4:17, Works、13:449)。

ウェスレーはこのエレグコス(信仰の本質的定義)と捉え、心に直接与えられるこの信仰理解を1740年から死の直前まで、説教集などで頻繁に用いました。このエレグコスというギリシャ語はヘブライ人への手紙11:1に出てくる表現で、エレグコスを与えられた者は神によって「確信」「確認」、論証的確かさが与えられると語ります(BE:26:159、179)。ウェスレーは信仰の本質的定義を第三の定義「信仰義認に基づく確証理解」と捉え、心に直接与えられる信仰の第三の定義は信仰の第一の定義「理性的同意としての信仰」と異なり、第二の定義「信頼としての信仰」(今回は言及せず)とも全く異なります(Letters、4:176)。その理由は第一・第二の信仰理解が間接的な知識だからです。

2で述べたことは、ウェスレーが自分の身体的・宗教的認識論を当時、よく熟知されたロックの認識論に言及し、頻繁に説教集などで展開しましたが、彼の認識論への多くの批判を国教会から受け、熱狂主義者と揶揄されました。このウェスレーの立場を現代で言い直すと、私たちは自分の神学論争を現代の日本人が良く熟知する哲学者、例えば西田幾多郎や鈴木大拙、親鸞などに言及し、人々の同意を求めるのはどうかということです。

結論をウェスレーが死去する一年前の説教で示しましょう。

『神の掟を守ること』、特に『あなたは精神を尽くしてあなたの神を愛し、隣人を自分のように愛しなさい』です。一言で言えば、聖とは『キリストにある思いを持ち』、『キリストが歩かれたように歩くことです』。この立場をいかなる変更もなく私は60年間主張しました。約50年前になって初めて信仰義認を明確に確信し、それ以降、毛の一筋ほどに動いたことはありません」(BE、4:147)。

「私は60年間主張しました」迄のウェスレーの文言は1730年以降の思想で、この立場を彼は「聖なる生活」者、僕の信仰者と呼びました。この信仰はここで言及されているように、「キリストにある思いを持ち」、「キリストが歩かれたように歩く」生き方で、この60年間の立場は1で述べた「第一の救いへの道」の思想内容です。次の文言「約50年前になって」は1738年以降のウェスレーの思想内容で、これを彼は「信仰義認に基づく確証理解」者、子の信仰者と呼び、2で述べた、「第二の救いへの道」内容です。まさに、ウェスレーは生涯にわたり「救いへの二つの道」を死の一年前でも明確に示したのです。

(元静岡英和女子短期大学教授)